

普段は問題なく表出できる単語が、ある場面で突然表出できなくなるのです。

また、表出したい単語がすぐに想起されないために、まわりくどい説明になってしまうことがあります。例えば、ターゲット語「いも虫」が想起できない場合、「それは・・・細長くて・・・茶色とかで・・・葉っぱにいて・・・毛が生えていて・・・」といった表現となります。

2.3.3 語彙指導の内容

2.3.3.1 目的

語彙発達を促す指導の全体的な目的は、対象児の語彙に関する理解と使用を伸ばし、対象児自身で必要な新しい語彙を獲得できるよう支援することです。具体的には、以下の4点が挙げられます

- 1) 単語に関して、意味と音韻表象の結びつきを強化する。
- 2) 新しい語彙を学習する際に、他の単語との関連性も学習できるよう支援する。
- 3) 語想起の課題に対して、「自分でできるヒント」ストラテジーの使用を促す。
- 4) 1) から3) に関して、指導場面だけでなく、日常生活でも活用できるよう促す。

2.3.3.2 語彙指導の一般的なルール

- 1) 語彙を獲得するために必要な方略を学習させることが目的になります。ターゲット語は、日常生活をしていく上で役立つ単語が良いでしょう。
- 2) ターゲット語と、対象児に親しみのある単語との関連性について、どのように関連性があるのか（例：同じカテゴリーに属する単語であることや、意味的に類似している単語であること等）を説明しましょう。
- 3) 異なる文脈の中でターゲット語がどのように使用されるのか、またどの範囲まで使用可能なのかを繰り返し提示して説明します。そうすることで、単語の本質的な意味を強化します。
- 4) 語彙の発達を促す指導をする意味を十分に説明します。

2.3.3.3 指導内容

語彙指導の実際例（1）

「単語を学習する方法」概要

新規語彙の学習ストラテジーの一つとして、Novel word mapping (NWM)があり、言葉と指示されたものとを結びつける基本になると考えられています。既報では、（年齢ではなく）語彙の大きさが、子どものNWMと関連する(Mervis & Bertrand, 1994)と言われ、聴力正常であれば、2歳頃に可能になると言われています(Golinkoff, Hirsh-Pasek, Bailey, & Wegner, 1992; Graham, Poulin-Dubois, & Baker, 1998)。難聴児では、語彙が200語程度になるとこのストラテジーが発達し始め、このあたりから難聴児の語彙が遅れ始めることが知られています。つまり、NWMが発達していることは、語彙を身につけるために重要です。

準備するもの

100単語程度の絵カード（任意）

方法

- 1) 呼称（説明）可能な語（＝既知の語）と不可能な語（＝未知な語）とに区別します。
- 2) 既知語から3枚、未知語から1枚の絵カードを抽出し、対象児の前に並べます。未知語の名称を指導者が提示し、正しいカードを選択させます。
例：既知語から「くるま」「トラック」「でんしゃ」を用意し、未知語から「ロープウェイ」を抽出します。この4枚を並べ、「ロープウェイはどれ？」と質問します。
- 3) 既知語を用いれば未知語を把握でき、かつその内容を推測できる（＝NWM）ことが理解されます。日常生活で知らない単語が出てきたとき、知らない語であることを判断し、その前後や周辺の情報から意味を推測するときこの手法を用いることができます。

語彙指導の実際例（2）

ステップ1：カテゴリーの理解の確認

対象児がグループやカテゴリー（上位概念語）の意味を理解していることを事前に確認する必要があります。以下の質問を行います。

「どんなグループに属していますか（どんな種類のものですか）」

必要であれば、例を出して対象児の理解を促しても構いません。例えば「コートやシャツはすべて『着る』だよ」のような説明を事前に行います。

「このカテゴリーに属する他の単語を教えてください」

ステップ2：単語の意味的特徴を学習

指導内容の概要

1つの単語に関するあらゆる意味的特徴を考えることは重要なことです。ここでは「語彙を自力で獲得するために必要なストラテジーを身につけさせること」を目標とします。

そのために、指導者と対象児は交互に質問と回答を行い、対象児にターゲット語に関して知っていることを話すよう促します。

準備するもの

絵カード（10枚前後、任意）

「食べもの」「野菜」「くだもの」「動物」「乗り物」「道具」等、いくつかのカテゴリーに分類できるものを用意します。

ステップ2-1：

方法：

カードの中から1枚を指導者が選択し、対象児に見えないように持ちます。

指導者「いまからこのカードについてヒントを出します。このカードが何かを当ててください。」

正答したら、役割を交代します。対象児がヒントを出す際には、出来るだけたくさんのヒントを出させるように促します。

ポイント：

対象児が、「相手が欲しがっている情報をどれだけ与えられるか」に重点をおきます。

「カテゴリー（上位概念）」「色や見た目での外見的な特徴（視覚的属性）」「用途」等のヒントを対象児が表出することを目標とします。ヒント表出が不十分である場合には、わざと間違った答えを言い、ヒントを追加させます。「ヒントを出したことで相手が答えた」というやり取りが成立し、対象児は満足して課題を終わらせることができます。

絵カード「飛行機」に対して、ヒントが「空を飛ぶもの」のみだった場合には、「鳥」など、ヒントには沿っているが誤ったものを意図的に答えます。

対象児が身振りでヒントを表出する場合には、出来るだけ口頭*で説明してもらい、幼児語が出た場合は、回答を述べてそのカードは終了とします（例えば「ワンワン」のようなヒントを出されると、「犬」としか答えようがないため）。

対象児がヒントを出せない場合は、指導者から「食べ物？動物？」「どんな形？」「どうやって使う？」等を質問し、ヒントを引き出したうえで回答して終わらせます。

* 音声を用いた指導の場合、児にあわせて手話等を適宜用いてください。

ステップ2-2：

準備するもの

絵カード以外に、以下を準備します。

文字カード（視覚的ヒントとして使用）

- ・「色・かたち」：何色ですか（しろ、きいろ、あか・・・）
- ・「カテゴリー」：仲間は何ですか
- ・「具体的特徴」：どんなものですか
- ・何に似ていますか

- ・どんな音が出ますか（静かなのか、うるさいのか。どんな鳴き声なのか）
- ・硬いですか、やわらかいですか
- ・どんな匂いがしますか
- ・どんな味がしますか
- ・どうやって作られますか
- ・何に使いますか
- ・どこにありますか
- ・いつ使いますか
- ・ほかにどんな仲間がいますか

方法

カードの中から1枚を対象児に選択させ、指導者に見えないように持たせます。

指導者「いまからそのカードについて質問します。それをヒントにして、そのカードが何かを当てます。ただし、絵の名前は言わないでください。」

指導者は上述の質問を行い、カードの絵を答えます。正答したら、役割を交代します。これを何回か繰り返します。

対象児が自発的に質問できない場合には、上記の文字カードを用いて質問させます（「カテゴリー」「色」「具体的特徴」など数例程度から開始し、徐々に増やします）。自発的な質問が可能となれば、文字カードによるヒントは減らします。文字が読めない場合には、音声*で質問内容を提示します。

*音声提示は一例であり、児の状況に応じて手話・指文字・文字などを用いて指導を行ってください。

ステップ2-3：

上記が可能となれば、以下の項目に進みます。

①類義語

- 1) 各単語には、類似した意味を持つ単語（類義語）があることを対象児が理解していなければなりません。例えば、「くるま」と「じどうしゃ」、「バイク」と「オートバイ」、「石鹸」と「洗剤」、「急須」と「ポット」、「パソコン」と「コンピューター」などは類義語であることを説明し理解させます。
- 2) 「ターゲット語と意味が似ている、もしくは意味が同じ単語を教えてください」と問います。

②対義語

- 1) 各単語には、反対の意味を持つ単語（対義語）があることを対象児が理解していなければなりません。多くの場合、ターゲット語は形容詞か抽象語になります。例えば、「大きい」と「小さい」、「高い」と「低い」などです。
- 2) 「ターゲット語と反対の意味を持つ単語を教えてください」と問います。

③関連語：

- 1) ターゲット語に関連する意味的特徴を理解することは重要です。自分がターゲット語を想起できなくとも、強い関連性のある意味的特徴が説明できれば、相手はターゲット語を同定しやすくなります。
- 2) 「ターゲット語を頭の中で絵に置き換えて、どんな絵か説明してください」「ターゲット語と強い関連があるもの（一緒に使うもの、など）を教えてください」と問います。

例えば、「スポーツで、ボールを使って・・・」と説明したとします。相手がここから「野球」というターゲット語にたどりつくためには、それを同定できるような決定的な語（この場合は「バット」など）を用いる必要があります。

語彙指導方法の実際例（3）

通常よく用いられる、1) 語彙のカテゴリー分けの練習、2) 語想起の練習（しりとりなど）3) 言葉の意味を説明する練習（説明のフォーマットを示して、説明の仕方を練習する）などを用いることも可能です。3) 就学児であれば教科書の文章のなかで「知っている言葉」に○をつけさせ、知らない単語について意味調べをして確認します。

語彙指導方法の実際例（4）

就学前～小学生低学年レベルの児で、まだ辞書などを使った意味調べが難しい場合には、ことばの絵じてんの内容を参考にカルタを作製します。「選択カード」には単語・絵・例文を、「読み手カード」にはその単語の意味を記しておきます。

例) 選択カード：単語『いばる』、絵『いばっている絵』、例文『おにいさんは すぐ に いばる』を書いておきます

読み手カード：意味「じぶんはえらいんだということをひとにみせつける」を書いておきます

単語難易度や選択肢の数はその子のレベルにあわせて調整が可能です。ゲーム感覚で課題に取り組むことができます。

またそれらの単語をドリルにして家庭での宿題で取り組むこともできます。ドリルでは意味と絵を線で結び、その語彙を用いた短文を作製するよう促します。

2.3.3.4 日常生活での援助

ことばが思いつかないときの援助

対象児がことばを表出する時、意味的な情報と音韻的な情報を完全な形で使用できず、瞬時に正しく発語できないことがあります。ここではその手助けとなる複数のストラテジーを紹介します。

a) ヒントのストラテジー

指導者はことばへのアクセスを補助するヒントを出すことができます。関連した質問を行うことによって、対象児は使用したいことばの意味的特徴や音韻的特徴を思い出すことができます。

対象児が使用したいことばが指導者にとって既知であるか否かにかかわらず、ヒントを出すことが可能です。ことばの語頭音が何かを質問する（＝音韻的ヒント）だけでも有効ですし、内容を問う（＝意味的なヒント）ことを通してことばを思いつかせる手がかりを与えることができます。

対象児にとっては、ことばの一部（例：ターゲット語の語頭音を尋ねる等）について質問されるよりも、ことばそのものに対する質問（例：ターゲット語と関連のあることばを尋ねる）の方が難しいことがあります。しかし、語彙の指導では、ことばそのものに対するヒント（質問）を対象児自ら考え、自ら使用できることが目標となります。このため「ことばそのものに対する質問を受ける」という経験は、対象児にとって役立ちます。意味的なヒントを与えるためには、想起しようとしていることばの「意味的特徴」に関して質問したり、関連する情報を挙げさせたりする事が有効です。

- ・ 外観 （例：何に似ていますか）
- ・ 場所 （例：どこにありますか）
- ・ 上位概念語 （例：動物の仲間ですか）
- ・ 機能 （例：何に使いますか）
- ・ 関連したことば（例：似たことばを教えてください）
- ・ 二者択一の質問（例：猿ですか、それともカンガルーですか）（指導者が対象児の想起しようとしていることばを把握している場合）

b) 自ら用いるヒント

語彙指導の最終的目標の一つは、質問のヒントをもらうことなく、ことばを思いつぐためのヒントを自ら使用できるようになることです。

思い出そうとしていることばと関連するヒントを自ら考えるための良い方法があります。例えば、意味的特徴については「どんなときにつかうことばかな？」（上述）となりますし、音韻的特徴については「どの文字から始まることばかな？」となります。これらの質問はカードやホワイトボードに記述しておき、対象児が視覚的にとらえて日常的に使用できるよう促していきます。

c) その他のストラテジー

リハーサル

ターゲット語に関連のある内容を繰り返し言わせることで、語を思いつぐためのヒントを自発的に使用する土台作りをします。例えば、「畑」ということばの場合ならば、「にんじんは畑で作られます。畑ではたくさんの野菜が育ちます。」というフレーズを繰り返し言わせます。

身振りとお絵かき

身振りや描画でも語を表現できる、ということを指導します。

d) 時間稼ぎ・ヘルプ

ことばが思いつかない時には、「ちょっと考えてるの。(言いたいことばについて少し考えています)」や「ここまで出てきているけど、ちょっと待ってね。(今、どんなことばを言いたかったか思い出しているところです)」のように言わせることも重要です。このようなフレーズを使用すれば、ことばを思いつくための時間を意図的に確保することができます。ことばを思いつかないために、その表出を諦めてしまうことは避けねばなりません。ですから、誰もがこのストラテジーを使用していること、いつでもそれをういて良いこと、を理解させることは非常に重要です。さらに「わからない」「知らない」場合には、その旨を相手に伝えられることも、実際のコミュニケーション場面では必要です。

e) その他日常生活で語彙を増やすための援助

語彙を増やす一般的な方法としては、「なぞなぞ」「本から語彙を増やす」「わからないことばが出てきたら、人に聞いたり調べたりする」などがあります。調べるためのツールは辞書が主になりますが、必ずしも本の形にとらわれず、インターネット辞書や電子辞書(ニンテンドーDSi「明鏡国語楽引辞典」等を含む)を用いてもよいでしょう。

2.4 統語指導

2.4.1 はじめに

統語指導の目的は、文章の構造や単語の並び順を対象児が理解して使用できることです。取り組む内容は以下の通りです。

- ・文章の中で注目すべき部分がどこなのかを説明する。
- ・文章の中で異なる役割を持つ部分について、ヒントを活用する。
- ・語の正しい順番を理解し、配列できるよう促す。
- ・以上の指導が日常場面でも活用できるように促す。

以下のように、視覚的手がかりを用いた指導を行います。

1. 主に色を用いる方法
2. 主にミニチュアを用いる方法
3. 主にシンボルを用いる方法
4. 動詞の意味を用いる方法

以下に指導方法の実際を示します。対象児のレベルや興味に合わせて手法を選択します。

(注：統語の中には様々な概念が含まれますが、本書では主として構文を対象とします。)

2.4.2 指導方法の実際1. 主に色を用いる方法

2.4.2.1 指導内容の概要

文章中の単語を色で区別する方法は、対象児にとって使用される単語や単語同士の関連性を理解する上で役立ちます。さらに、発話における文法的な複雑さや文章の長さの改善も目的としています。

以下の項目（5W1Hなど）に着目し、各項目に色をつけ指導を行います。

表1A (基本要素)	質問	要素	色
	なにをしているの？	動詞	黄色
	誰が？	主語	橙
	何を？	目的語	赤
	どこで？	場所	青
	いつ？	時間	紫

表1B (発展要素)	質問	要素	色
	何を使って？	道具	茶色
	誰に？	間接目的語	桃色
	どうやって？	副詞	青緑色
	どんな風に？	形容詞	緑
	なぜ？	理由	黒

例

今日	男の子が	ジュースを	急いで	飲んだ
いつ、時間	主語	目的語	どのように	動詞

2.4.2.2 準備するもの

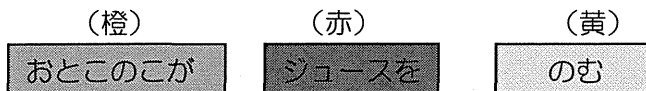
色シート

例：



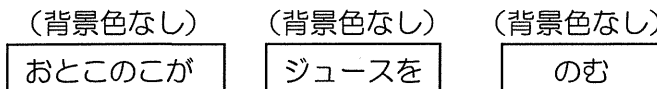
色つき文字カード

例：



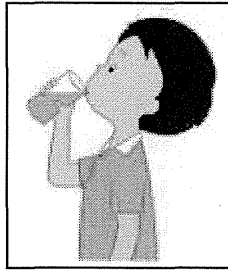
色なし文字カード（色つき文字カードの背景色を無しとしたもの）

例：



動作絵カード（または実際に動作をして見せるための小道具）

例：「おとこのこがジュースをのむ」絵カード、またはコップなど



（出典：NPO法人言語発達障害研究会

S-S法語彙・語連鎖カード）

文章カード

例： おとこのこがジュースをのむ

質問カード

例： （橙）
だれが？ （赤）
なにを？ （黄）
どうしているの？

文字カード（背景色なし）

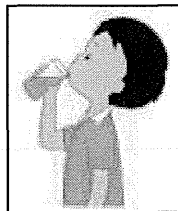
例： おとこのこ が ジュース を のむ

2.4.2.3 方法

単純な文（例：おとこのこがジュースをのむ）から開始し、徐々に文章を複雑にしていきます。

ステップ1

動作絵カード、文章カード、色シート、色つき文字カードを以下のように並べます。



おとこのこがジュースをのむ



色つき文字カードはシャッフルして並べます。
対象児には、正しく色シート上に移動させるよう指示します。

のむ

ジュースを

おとこのこが

色つき文字カードを読みながら、色シートに移動させるように促します。

ステップ2-1

ステップ1の手順と同様ですが、文章カードを提示せずを実施します。

ステップ2-2

ステップ2-1が出来るようになれば、質問カードを使って質問を行います。例文が複雑化するにつれ、表1の質問項目を増やしていきます。

ステップ3

色なし文字カードを用いて、同様の手順で行います（文章カードは使用しません）。例文が複雑化するにつれ、表1の質問項目を増やしていきます。

ステップ4

文字カードを用いて、同様の手順で行います（色シートは使用しません）。例文が複雑化するにつれ、表1の質問項目を増やしていきます。

2.4.3 指導方法の実際2. 主にミニチュアを用いる方法

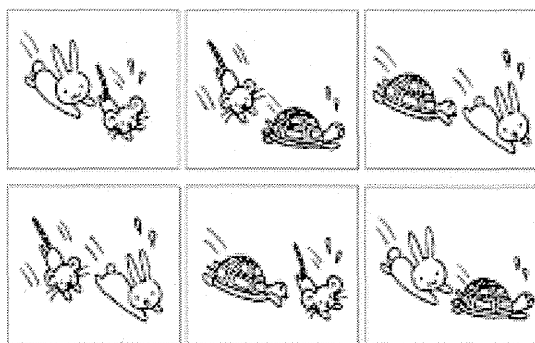
2.4.3.1 指導内容の概要

読めない字が多い対象児においても指導が可能な方法です。ミニチュアを操作することで、関心をもたせながら動作主や対象を意識させることができます。また、「色マーク付き統語指導シート」を使うことで、助詞による意味の違いを理解させることができます。

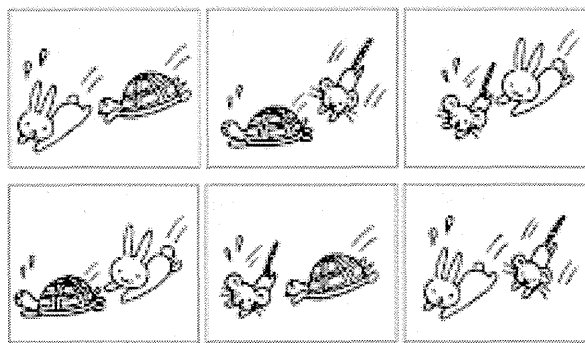
助詞を用いた統語構造の理解を促進することを目的としていますが、理解課題のみでなく表出課題も取り入れながら指導します。

2.4.3.2 準備するもの

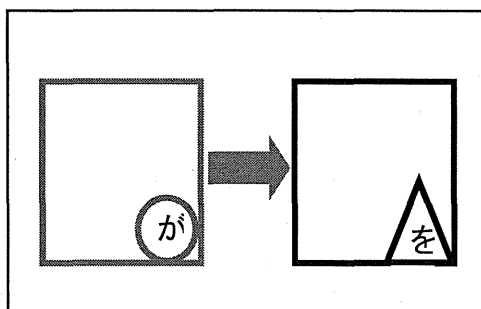
① 絵カード 6枚 (動作主→対象)



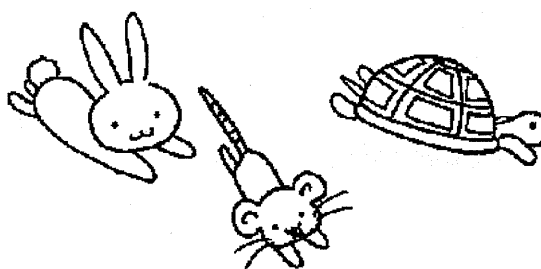
② 絵カード 6枚 (対象←動作主)



③ 色マーク付き統語指導シート



④ ミニチュア3つ (他小道具)



2.4.3.3 方法

ステップ1

	手 順	ヒントの減らしかた (フェーディング)
1	①の絵カードを1枚見せながら発話をしてみせ、対象児にも発話を促します。 例) 「うさぎがねずみを追いかける」	「絵を見て何をしているか説明できる」場合は、絵カードを見せて「これ何してる?」と問い、対象児に発話を促します。
2	(1) で用いた絵カードと色マーク付き統語指導シート(③)を提示して、対象児にミニチュア3つを渡します。「絵を見ながら、(ミニチュア)を(統語指導シート)に入れてね」と促します。	絵カードを提示してミニチュアを統語指導シートに入れることができる場合は、絵カードを見せずに、音声提示*のみでミニチュアをシートに入れるよう指示します。
3	指導者が③を指差しながら状態を説明し、その後実際に操作を行ってもらいます。 例) 「うさぎがねずみを追いかけているね」と言い、実際にミニチュアで追いかける真似をするよう促します。	上記が可能であれば、統語指導シートをなくして、音声提示*のみで対象児にミニチュアの操作してもらいます。
4	統語指導シートにミニチュアを戻して、指導者は絵カードを見せながら状態を質問します。困難な場合はシートにあるミニチュアと「が」「を」の文字を指差しながら再度聞きます。例) 「誰が追いかけたの?」「誰を追いかけたの?」と聞き、対象児に回答を促します。	絵カード+統語指導シートにより「だれが」「だれを」の問いに答えられる場合は、シートなし(絵カードのみの提示)で問いに答えられるかを確認します。さらにそれも可能であれば、絵カードなしで問いに答えられるかを確認します。
5	4~5枚の絵カードを用いて、(1)から(4)の手順を実施します。	
確 認	指導者が音声提示*し、そのとおりにミニチュアを操作できるようになったら、①の絵カードを6枚提示して、受信を促します。 例) 「うさぎがねずみを追いかける、はどれ?」	

*音声提示は一例であり、児の状況に応じて手話・指文字・文字などを用いて指導を行ってください。

ステップ2

ステップ1が可能になったら、②の絵カードでも同様の手順を実施します。

以上のような過程を、「～が・～を」の助詞の他にも、逆語順、授受構文、受動構文、使役、関係節などの項目についても指導を進めると良いでしょう。

2.4.4 指導方法の実際3. 主にシンボルを用いる方法

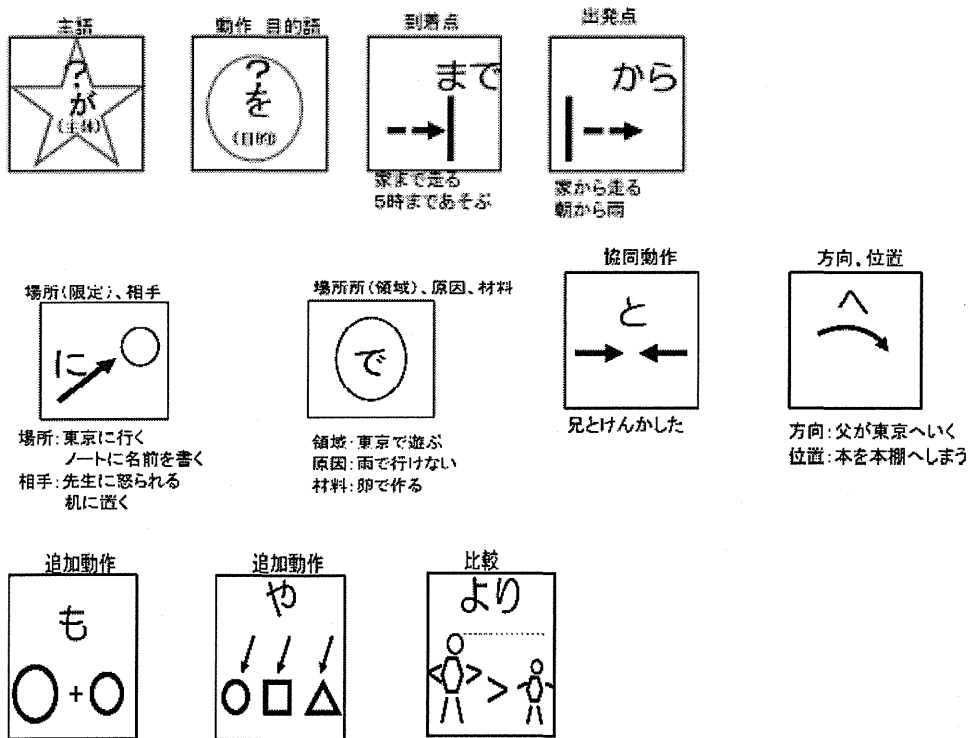
2.4.4.1 指導内容の概要

格助詞には多くの意味と使い方があり、日常のコミュニケーション場面に汎化しにくいことがあります。格助詞の意味をイメージとして抽象化し、図形にあらわして繰り返し指導します。

2.4.4.2 準備するもの

- ・シンボルカード（格助詞の役割をイメージ化したカード）（資料1）

例：



- ・文字カード
- ・情景画（絵カード、写真など）
- ・動画（汎化を目的に使用します。可能であれば使用するとよいでしょう。）

2.4.4.3 方法

ステップ1.

ステップ1-1

情景画を提示して、シンボルカードと文字カードを指導者が並べる。

ステップ1-2

指導者が、情景画とシンボルカードもしくは文字カードを交互に指差しながら、格助詞の指し示すものを対象児と共に確認する。

ステップ1-3

以下の質問を行う。質問に答えられなかった場合は、対象となる格助詞シンボルカードをヒントとして指差しする。

例) 動作主(だれが?)、対象(なにを?)、場所(どこに?どこへ?)、到着点(どこまで?)、出発点(どこから?)、比較(どちらが~より...ですか?)、協同動作(だれと?)、追加動作(ほかには~?)

例)

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">写真絵 お母さんがお兄ちゃんに本を渡す</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">写真絵 妹が友達と遊園地に行く</div>
だれが渡したの だれに渡したの 何を渡したの	だれが行ったの だれと行ったの どこに行ったの
助詞の意味も説明	助詞の意味も説明

ステップ2.

ステップ2-1

情景画とシンボルカードの見本を見ながら、格助詞のシンボルカードを対象児に並べてもらう。

ステップ2-2

ステップ1-3の質問を行う。質問に答えられなかった場合は、対象となるシンボルカードをヒントとして指差しする。

ステップ3.

ステップ3-1

情景画を見ながら、シンボルカードを対象児に並べてもらう。

ステップ3-2

ステップ1-3の質問を行う。質問に答えられなかった場合は、対象となるシンボルカードをヒントとして指差しする。

例) 動作主(だれが?)、対象(なにを?)、場所(どこに?どこへ?)、到着点(どこまで?)、出発点(どこから?)、比較(どちらが~より...ですか?)、協同動作(だれと?)、追加動作(ほかには~?)

ステップ4.

ステップ4-1

情景画を見ながら、シンボルカードと文字カードを対象児に並べてもらう。

ステップ4-2

ステップ1-3の質問を行う。質問に答えられなかった場合は、対象となるシンボルカードをヒントとして指差しする。

ステップ5.

ステップ5-1

情景画を見て、説明をしてもらう。

ステップ5-2

ステップ1-3の質問を行う。質問に答えられなかった場合は、対象となるシンボルカードをヒントとして指差しする。

ステップ6.

ステップ6-1

動画や実際の動作を見せて、ターゲットとなる事物名称や動詞を提示し対象児に文章での説明を求める。

ステップ6-2

ステップ1-3の質問を行う。質問に答えられなかった場合は、対象となるシンボルカードをヒントとして提示して再質問する。

2.4.5 指導方法の実際4. 動詞の意味を用いる方法

2.4.5.1 指導内容の概要

意味的な指導としては、動詞の意味だけを教えて、取り立てて構造を教えない、という方法もあります。「これが『注ぐ』だよ」「『片付ける』をやって見せて」「これは『走る』だよ」などで説明して、動詞について意味を説明します。

対象としては小学校中学年以降で、ある程度の語彙および統語能力を有するものの、年齢相当からは著しく遅れている児となります。

2.4.5.2 準備するもの

いくつかの動詞

小道具（実際に動作を行うためのまもごとセットなど）

2.4.5.3 方法

まず一つか二つの動詞をそれぞれのセッションで選択します。「場所を変える動詞」（例：行く、走る、飛び込む、など）から「状態を変える動詞」（例：洗う、磨く、切る、書く、など）の順で行います。

「場所を変える動詞」

ステップ1.

ターゲット語の説明のために、ことばの意味を一緒に書いて理解させるようにします。対象児には、そのことばについて知っていることを何でも話すように指示します。

例) 「はこぶ」について知っていることを教えて・・・荷物を運ぶ、荷物を動かす、など

ステップ2.

そのことばに関する説明を箇条書きにしていきます。子どもが意味の一部をとばしてしまったときには、わざとその部分に違反するような動作をやって見せて、子どもに正しいかどうかを尋ねます。

例) 「はこぶ」・・・「動かす」といった場合

→「たんすをはこぶ」「いすを動かす」と箇条書きする

→書きだした行為に該当するものの、元々の「はこぶ」に当てはまらない行為（例：鉛筆を動かす、など）を見せ、「これは？」と尋ねる

→子どもと一緒にどうすれば「はこぶ」に該当する表現になるかを相談する
これによって「大きく、重たいものを動かす」という表現を書き加えます。

ステップ3.

こうして表現ができれば、「観察者」と「演者」に分かれて役を演じます。

ステップ4.

指導の後半では、いくつかの動詞の意味が比較・対比できるように一緒に練習します。子どもと指導者が一つの事柄を様々な動詞で表現できるように演じます。（「荷物を運ぶ」「積荷を運搬する」など）観察者は、どの動詞が、どの条件を表現するのに使える・使えないということを判断し、そして理由を答えます。

「状態を変える動詞」

ステップ1.

ターゲット語の説明のために、ことばの意味を一緒に書いて理解させるようにします。対象児には、そのことばについて知っていることを何でも話すように指示します。

例) 「洗う」について知っていることを教えて・・・台所でリンゴを洗う、洗濯機で服を洗う、きれいになる、など

ステップ2.

そのことばに関する説明を箇条書きにしていきます。子どもが意味の一部をとばしてしまったときには、わざとその部分に違反するような動作をやって見せて、子どもに正しいかどうかを尋ねます。

例) 「注ぐ」・・・「入れ物の中に何かを入れる」といった場合
→「中に入れる」「容器に入れる」と箇条書きする
→書き出した行為には該当するものの、元々の「注ぐ」に当てはまらない行為（例：おはじきの一つとりだしてカップに落とす、など）を見せ、「これは？」と尋ねる
→子どもと一緒にどうすれば「注ぐ」に該当する表現になるかを相談する
これによって「水みたいなものを入れる」という表現を書き加えます。

「洗う」・・・「きれいにする」と言った場合→手で払うしぐさ（＝わざと違う動作）をしてみせる→正しいかどうかを尋ねる

ステップ3.

こうして表現ができれば、「観察者」と「演者」に分かれて役を演じます。

ステップ4.

指導の後半では、いくつかの動詞の意味が比較・対比できるように一緒に練習します。子どもと指導者が一つの事柄を様々な動詞で表現できるように演じます。（「コップを水で満たす」「コップに水を注ぐ」など）観察者は、どの動詞が、どの条件を表現するのに使える・使えないということを判断し、そして理由を答えます。

2.4.6 指導方法の実際5. 授受構文の指導

2.4.6.1 指導内容の概要

ここでは、「あげる・もらう」のつく文章理解と表出について述べます。重要な点は動作主（始点が）がどちらなのかを理解することです。

失語症構文検査の聴覚的理解項目のうち、特に授受構文（問10・13・18・27）が未習得である児を対象とします。

2.4.6.2 準備するもの

S-S法言語発達遅滞訓練用絵カードなど

動作主、プレゼントなどのミニチュア

文字カード（おとこのこ・おんなのこ・うさぎ・が・に・あげる・もらう）

2.4.6.3 方法

ステップ1

対象児と指導者との間で、授受構文のカードと文字カードを見ながら、実物（ミニチュアも可）を使って「あげる」動作・「もらう」動作を実際にやってみます。表出も併用しましょう。

ステップ2

「うさぎ-男の子」のようなペアのカードをセットで用意します。

「うさぎがあげるはどっち?」「うさぎがもらうはどっち?」と問い、選択させます。その際に文字カードなどを使用し、「動作主（始点がどちらにあるか）」に注目することが大切であることを伝えます。

また1枚だけカードを見せ、「だれがあげてる?」「だれがもらってる?」と質問し答えさせます。

ステップ3

ミニチュアを用いず絵カードのみを見ながら、文字カードを配列させます。

ステップ4

絵カードを6枚並べます。指導者は「うさぎが男の子にプレゼントをあげる」などの課題文を言い、児に正しいカードを選択させます。

ステップ5

絵カードを見ながら、児にその状況を説明させます。